

かくひと

書く人

まえ」と怒鳴りながら、フオローはうまい。サービスピ精神がありユニーク。開けっぴろげで隠すところがないですよ」。院長のエピソードはこと欠かない。

だが、院長個人ではなく病院全体をテーマにした。「神の手」を持つ医師が一人いてもしょうがない」は病院の方針でもある。「レベルの高い

がいかにも難しいか。医局を中心とした大病院や公立、私立病院と、それぞれが抱える問題も浮き彫りにする。共著者で次男の律さん(前)とともに未知の分野に踏み込み、専門的な資料を集め、なかなか表に出ない医師らへのインタビューを繰り返した。

『ぼくらの七日間戦争』など少年少女が活躍するファンタジー小説の人気作家が手掛けたのは、病院のドキュメンタリー。

就いたのをきっかけに、四年前から病院の取材を始めた。

カリスマ性があり、人間的魅力にあふれる鈴木院長。「開院当時はほとんど家には帰らず、給料袋は病院においたまま。若い医師には「辞めち

る。日本の病院では、それ自体が大変なこと」いい病院をつくること

体験もとに探った実力

六月にも『ぼくら』シリーズの新作を出し、創作意欲は衰えない。「一地方都市に世界から医師や患者が集まってくる。数字だけでは分からない実力ある病院をもっと知ってほしい」。その思いを異色の一冊に込めた。

角川学芸出版・一三六五円。(石屋法道)

年、循環器専門の豊橋ハートセンターが誕生した。「いい病院とは何か。体験をもとに探った」

二〇〇五年二月、念のためと受けた診断で、センターの鈴木孝彦院長と出会った。思いもせず二本の冠動脈が詰まりかけていたが、カテーテル治療を受け回復。院長の手柄と病院にほれ込んだ患者団体「ハートええじゃないか友の会」の会長に

『いい病院』への挑戦

作家 宗田 理さん (84)

